
目次

SUMMARY	i
序論	1
第一章 男性キャラクターについて	3
A. Djay——ちよいワルでかっこいい、夢を追う男——	3
B. Clyde——妻に頭が上がらない、引き立て役としての「普通の」男——	7
C. Shelby——バランスをもたらす「白い」男——	10
D. Skinny Black——成功者に成り上がった、嫌味なヤツ——	12
第二章 女性キャラクターについて	15
A. Nola——自身の生き方に悩む、現代の若い女——	15
B. Shug——自信がなく、謙虚な女——	19
C. Lexus——下品で、いやらしく、生意気な、「最悪の」女——	22
D. Yvette——仕事に生き、夫よりも優勢に立とうとする女——	25
結論	29
参考資料一覧	iii

(総文字数 30445 字)

SUMMARY

In this thesis, I discuss the movie *Hustle & Flow* (2005), examining the four main male and female characters. I compare them, focusing on their behaviors, words, lifestyle, ways of thinking, and fashion.

In the first chapter, I deal with the four main male characters: Djay, Clyde, Shelby, and the rapper called Skinny Black. They all have a musical talent.

Djay, the main character, who is a hustler or pimp, struggles to realize his dream to become a pro-rapper. I analyze how he embodies a new image for African-American man. This is because he is depicted as a good-guy pimp, a man of responsibility. Clyde, an African-American sound engineer, has an aggressive wife, Yvette. He is described as a good employed man who tries hard to support his friend Djay and his frustrated and hysterical wife. Shelby, a nice, decent, white sound engineer/musician, joins Djay's rap unit, bringing racial balance to the story. Skinny Black, a popular pro-rapper who had been raised in Memphis together with Djay and Clyde, is now a nasty and arrogant guy. It is suggested that the tough life as a professional musician turned him into a different guy.

In the second chapter, I look at the four main female characters: Nola, Shug, Lexus (prostitutes who live with Djay, the pimp), and Yvette, the career woman married to Clyde.

Nola, a young white woman, worries about her own lifestyle as a prostitute. At the end of this movie, she finds a new, acceptable lifestyle as chief sales person of Djay's music. Shug is a pregnant African-American woman who looks very unsure of herself. Later in the story she obtains confidence through singing with Djay's rap unit. She succeeds partly because she does not demand a leading role on the team. She is totally satisfied with her supporter position. Lexus, an African-American single mother, is depicted as a terrible person. She is lazy, self-centered, and demanding. As a result, in the middle of the story, she is evicted from Djay's house. Yvette, Clyde's wife, always complains about something: her

colleagues, her work place, and people her husband meets frequently, such as Djay, the pimp and the prostitutes.

In the final part of the thesis, I compare the description of the male and female characters. All of the male characters are cool and decent. Their harsh backgrounds are often explained or suggested. Therefore, the audience of this movie can sympathize and support them. On the other hand, the female characters are described stereotypically as if they are the four worst types of woman. For the audience, there is no room for compassion because the movie hardly refers to how and why these women came to lead their respective lifestyle. In other words, we can't understand their worries, troubles, or sufferings.

I conclude that the difference between the descriptions of the male and female characters reflects the producers' double-standard thinking about men and women. Men are depicted realistically while women are depicted stereotypically. Since all of the characters were intentionally created by producers, this movie demonstrates their views of how to negatively perceive women.

序論

本論の目的は、映画 *Hustle & Flow* (邦題『ハッスル&フロウ』、監督・脚本：Craig Brewer、製作：John Singleton, Stephanie Allain、2005年)の魅力を探り、登場するキャラクター、特に黒人キャラクターがどのような人物として描かれているかを分析することである。

かつて、Donald Bogle は、自身の著書 *Toms, Coons, Mulattos, Mammies and Bucks: An Interpretative History of Blacks in Films* (1973年)において、黒人キャラクターは、5つの基本的なステレオタイプに分類できると定義した。その5つのステレオタイプとは、「アンクル・トム」「クーン」「ムラトリー」「マミー」「バック」である。そして、このステレオタイプの「バック」のイメージを投影し、法に触れながらも、どこことなくカッコいい、アンチヒーローとしての黒人男性の姿を描いたのが、1970年代に流行する「ブラクスプロイテーション映画 (blaxploitation film)」である。

このように、かつてのアメリカ映画における黒人キャラクターは、様々なイメージ、特にステレオタイプに当てはめられて描かれてきたと言われている。では、近年のアメリカ映画では、黒人キャラクターはどのように描かれていますか。そこで、本論文では、かつてのブラクスプロイテーション映画を発展させた、現代風の「ネオ・ブラクスプロイテーション映画 (neo-blaxploitation film)」である *Hustle & Flow* を研究する。この作品は、黒人の小さな世界 (マイクロコスモス) を描いた映画である。登場人物は少ないが、本論文ではそれらの登場人物の描かれ方を分析する。特に、意外性を持つキャラクターや、これまでの黒人俳優を主人公にした犯罪映画 (ブラクスプロイテーション映画) とは異なる面白さに注目して、論を進めていきたい。

ここで、論を進めるにあたり、映画のあらすじを紹介しておこう。主人公の黒人男性 Djay (D ジェイ) は、アメリカ南部のメンフィスで売春斡旋業と麻薬売買によって生計を立てている。Djay は、白人売春婦の Nola (ノラ)、シングルマザーの黒人売春婦 Lexus (レクサス)、元売春婦で、現在妊娠中の黒人女性 Shug (シュグ) と共に生活している。

ある日、Djay は旧友の黒人男性 Clyde (クライド) と再会し、音楽への情熱を取り戻す。そこで「プロのラッパーとして活躍する」という、少年時代の夢を思い出し、サウンドエンジニアの Clyde と楽器演奏者の白人男性 Shelby(シェルビー)とサウンドチームを組む。彼らは、即興(improvisation)を交えた音楽制作に没頭していくのであった。

始めは順調に見えた音楽制作も、次第に行き詰り、チーム内の雰囲気は悪くなる。更に、Djay たちの音楽制作を見下す Lexus や、「売春婦だらけの家」にこもって音楽制作を行う夫 Clyde に不満を持つ Yevette(イヴェット)からの風当たりは強い。しかし、Shug が「フック」というコーラス部分を担当し、Nola が売春をして高価なマイクを手に入れるなど、協力的な女性陣の力を借りて、Djay たちは次第に良い作品を作り上げていく。

7月4日の独立記念日には、Arnel (アーネル) のバーでパーティーが行われ、メンフィス出身のプロ・ラッパー Skinny Black (スキニー・ブラック) が「凱旋」し、来店する。Skinny に自作の曲を聞いてもらえば、夢に一步近づけるかもしれないと思った Djay は、チームで制作した “It’s Hard Out Here for a Pimp” などの曲が録音されたデモ・テープを彼に渡す。しかし、酔った Skinny は、デモ・テープを壊し、トイレに落としてしまう。それを見た Djay は激怒して暴力沙汰を起こし、逮捕される。

Djay の逮捕によって夢は断たれ、メンバーは絶望の淵に追いやられる。一方、Nola は Djay の言いつけを守り、ラジオ局に出向いて曲を売り込む。その結果、Djay たちの曲はラジオで流され、彼らの曲はヒットしていくのだということが予想されるラスト・シーンである。以上があらすじである。

以下、本論文では、映画 *Hustle & Flow* に登場する人物がどのように描かれているのか、第1章では男性キャラクターについて、第2章では女性キャラクターについて、それぞれ分析していきたい。

結論

本論では、各キャラクターに注目して映画 *Hustle & Flow* について考察してきた。総括すると、この映画は「男女の描き方に差がある作品である」ということが言える。最後に、男女の描き方の差異に着目して、論をまとめていきたい。

まず、男性の主要登場人物を見ていくと、色々なキャラクターの配置という意味で、バランスが取れていると言える。サウンドチームの3人——非日常的な犯罪行為をする主人公の黒人男性 Djay、どこにでもいそうな普通の黒人男性 Clyde、人種（外見）的にも内面的にもバランスをもたらす白人男性 Shelby——は、それぞれのキャラクターに違いはあるが、みな人間的、もしくは内面的に良い人で、バランスの取れた人格だと言える。

これに対して、Djay が憧れ、またライバル視する黒人男性 Skinny Black は、ラッパーとしては成功しているが、成り上がりの嫌なヤツとして描かれている。彼自身を見ると、バランスの取れた人物であるとは言えない。しかし、これらの4人の男性を見ると、人物構成にある種のバランスがあり、制作者側としては、「良い人も嫌なヤツも、黒人も白人も、様々な人が混在するのが現実社会」ということが言いたいのだと分かる。つまり、この映画は、「色々な人がいる世界」を最小化した「ミクロコスモス」を描いているように感じられるのである。

また、この4人は、そろって音楽的才能があり、音楽に対して熱い情熱を持って、夢に向かって奮闘するという点があり、その姿は共通して「かっこよく」描かれている。その上、Djay と Skinny については、生い立ちなどのバックグラウンドが示される。また、Clyde は妻に辟易しながら我慢している様子が、セリフや態度から分かる。Shelby は、自販機の修理工としての仕事について説明するシーンがある。したがって、観客はこれらの男性キャラクターに対しては共感しやすいし、この映画を見進めていくうちに、彼らを応援したいような気持ちすら芽生えてくるのである。

では、女性キャラクターはどのように描かれているのだろうか。女性キャラクターには、後から印象が変わる女性もいるが、基本的にはマイナス・イ

メージを持つ女性ばかりであることは間違いない。例えば、Nola、Shug、Lexusは「売春婦である」ということが、まずマイナス・イメージに繋がりを。加えて、様々な場面から、それぞれの人物が抱える問題点を見出すこともできるだろう。また、一見「理想的な妻」でありそうな Yevette ですら、Clyde に愚痴を吐き続けるシーンが始まると、内面に問題がある女性として描かれていることが明らかになってくるのである。

これらの女性キャラクターは、たとえ多少は長所や才能があったとしても、それはクローズ・アップされない。むしろ、悪い面や嫌な面が男性キャラクターとのやりとりや関係性の中に強調され、強烈に描かれているのである。

例えば、一番分かりやすいのは Lexus である。彼女はあまりに口が悪く、下品で、更にダンサーや売春婦として誰よりも稼ぐということもあり、いつも「偉そうにしている」。よって、そのような彼女の態度に我慢できず、キレた Djay によって、家を追い出されてしまうのである。Lexus の子どもの面倒を見たり、売春婦たちの生活の世話をしたりするような、子供好きで、責任感のある主人公の Djay できさえも、ここまで態度がひどいと追い出さざるを得ない、というように描かれているのである。

一例として Lexus の例を挙げたが、この映画の観客は、Lexus のみならず、全ての女性キャラクターに対して、共感を抱きにくいのではないだろうか。また、長所と短所の両方を持つ、普通の人間として描かれている者もない。つまり、女性キャラクターは、それぞれの悪い面が強調され、まるで「男性が考える、最悪な女性 4 パターン」のように描かれているのだ。言い換えると、女性の主要登場人物はキャラクターが典型的であり、更にいろいろあるタイプのなかでも「特に最悪なパターン」ばかりを分かりやすく描いている。男性キャラクターと比較すると、男性は「良いところがある」が、女性はほぼ全員「良いところ」が強調されていないことは明らかである。その意味でも、キャラクター化全体のバランスが悪くなっているのだ。

女性キャラクターばかりが最悪に見える理由のひとつは、女性キャラクターの生い立ちや、現在の仕事についてなどのバックグラウンド情報が、はっきり示されることはないからである。例えば、Nola、Shug、Lexus は、どのような理由があって、売春婦という「普通ではない生き方」を選んだのか、

シングルマザーである Shug、Lexus の子どもの父親は誰なのか、Yevette はどのような環境の職場で働き、苦勞し、悩んでいるのかなどである。つまり、それぞれの女性がどのような環境で、どのような悩みを持って生きているのかが分からないのだ。

これは、生い立ちや、普段の生活などのバックグラウンド情報が示されることが多い男性キャラクターとは対照的である。映画の制作者は、男性キャラクター、特に黒人に関しては、同情や理解が得られやすいように「事情説明」をしている。しかし、その一方で、女性キャラクターには、あたかも同情する隙を与えないように、意図的にそれぞれの生い立ちなどのバックグラウンドを提示しないのかと思えるほど、何も説明がなされていないのである。

例えば、男性キャラクターは、過去のことを話すシーンが何度かあり、特に Djay は、幼いころに亡くなった父親の話をする場面も見られるが(Ch.5、Ch.14)、女性キャラクターが過去のことや、両親など家族の話をする場面は一切無いのである。また、Djay は、父親の話はするが、母親については一切言及しないということにも、この映画の制作者の「男女の捉え方の違い」が表れていると言えよう。

このような女性キャラクター描き方には、この映画の制作者が持つ、女性に対する偏見が投影されていると言えるのではないだろうか。つまり、制作者側としては、この映画を見る女性観客に対して、「このような女性像は、男性側から見ると最悪である。だから、こんな女性にはなってはいけない。」ということ、(男性が女性よりも優位であるかのように)「上から目線で」教育的観点から訴えかけているかのように感じられる。

一方、悪い印象ばかりの女性キャラクターでも、男性キャラクターからの働きかけによって、「男性にとって理想的な女性」に変化していく様子が多く描かれていることにも注目したい。これに当てはまるのが、主人公の夢を献身的に応援し、最終的には、代理として Djay の夢を叶えるキーパーソンとなる Nola、男性の夢の邪魔をせず、しかも歌が上手くて実践的にも力になることができる Shug、夢に向かって奮闘する夫を理解しようと努力し、ついに得意の手料理の差し入れまでするようになる Yevette である。ここにも、男性が求める女性像が垣間見える上に、「男性の働きかけによって女性

は変化していく」というような、男性の存在や働きかけがあってこそ良い女性に開花するのだというメッセージが感じられる。

しかし、この「良い女性に開花する」3人の女性キャラクターは、結局は自分のために開花したのではなく、男性にとって「都合の良い女性」になるために開花したと言えるのではないだろうか。例えば、Nolaは自分にできることを考え、自身の能力を生かし、Djayたちの楽曲を売り込む営業をするが、実際には売春に近いことをしてDJを説得しているに過ぎない。つまり、これまでと目的は異なるが、結局は売春以外では力を発揮できないことには、変わりはないのである。

また、Shugに関して、Djayたちに歌えと言われて歌っているだけで、歌手になろうとするわけでもなく、自分ひとりで曲を作ったり、売り込んだりすることはできない。このように、女性キャラクターは、たとえ「開花」したとしても、所詮は「男性の良きサポーター」になることが彼女たちの限界なのである。

これらの女性キャラクターの描き方をまとめていくと、その特徴は、(1)「最悪な女性像を示し、それぞれの人物を典型的に描く中で、これでは男性もたまらないだろうという方向に話を進める」、(2)「こうした女性が良い方向に変化していく様子を提示することによって、制作者側は、女性観客に対して、男性が思う『理想的な女性』と『最悪な女性』の両極端な例を示す」ということが挙げられるだろう。また、更には、(3)「たとえ『理想的な女性』に開花したとしても、結局は男性にとっての理想な女性像であり、『サポーターとしての、都合の良い女性』であるというだけで、所詮女性は男性の上には立てないことを示す」という特徴もあるように思われる。

また、男性キャラクターは、バランスを考慮してそれぞれのキャラクター性を構築しており、全員が割と「かっこよく」描かれているが、そうすることによって、女性キャラクターのバランスの悪さや、共感できないことを意図的に強調している。つまり、この映画に出てくるキャラクターは、制作者が考える「男女のあり方」を考慮して、意図的に男女の描き方に差異を付けて、キャラクター化されているのである。結局のところ、男性が見て面白い映画であり、女性は「他者」として描かれていると言えよう。